

ヤコブは、頑強な体を持つ大男で、体中からエネルギーを発しているような男性だと、私は想像します。女性から見ると魅力的な男性に見えるでしょう。彼の活力には驚嘆します。ヤコブは、父・イサクと母・リベカに与えられた双子の次男です。彼の人生は、兄・エサウの空腹の弱みに付け込んで「長子の権利」を奪うことから始まっています。そして、母・リベカと共謀し、老人性白内障で目が見えなくなった父・イサクを騙し、兄・エサウに与えるはずの神からの「祝福」をも奪い取ります。ヤコブは人の弱さを知り、これを巧みに利用して、自分のものにする計算高く、狡猾な人と言えるでしょう。

「長子の権利も「祝福」も奪われた兄・エサウは激怒し、ヤコブ殺害を固く決意します。ヤコブは、母・リベカの里に向かって、孤独な逃亡を強いられます。その途中、天まで達する階段を、天使たちが上り下りする夢を見ます。神の守りが告げられたのです。リベカの里で、従妹になる美しいラケルと出会い、見初めます。彼は仕事のできる人で、することは全て大きな収穫をもたらしました。ラケルの父・ラバンは、ヤコブの労働力を利用しようと、たくらみます。ラケルを愛していることを知って、まず、姉のレアと結婚させ、14年間の労働を条件に、ラケルとの結婚を認めます。ヤコブは14年間、ただ働きをさせられ、ラバンは彼の働きによって、大きな富を得ます。ヤコブは、姉・レアと妹・ラケル、そして、2人の側女と、合計4人の妻を持ち、男の子12人、女の子1人を儲けます。男の子12人がイスラエル12部族の基礎になっていきます。

ヤコブは、義父・ラバンから独立し、多くの家畜を持つ大牧羊者になっていきます。そして、殺意を持っているはずの兄・エサウとの再会を果たそうとします。恐れに震えるヤコブは、家族、財産の全てを川向うに渡し、一人残ります。このヤコブの渡しで、神と明け方まで、祈りの格闘をします。祈りのしつこさに神は辟易しますが、「祝福して下さるまでは離しません」と喰らいつきます。神は「お前はヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」と祝福を与えます。兄・エサウと和解しますが、ヤコブには「赦されていない」という不安が渦巻いています。

ヤコブの人生は、騙し騙されることの連続のようです。自立してからのヤコブは、騙すことなく、騙されてばかりです。その中で彼は、労力と知恵を尽くし、巧みに、計算高く、狡猾に振る舞っています。そして、実質を取っていきます。しかし、ヤコブは自分自身と、自分と関わった人間の中に醜悪な罪があることを深く知っていました。知っていたから、それを赦して下さる神を、ひたすら求め、「赦し」なくしては生きられないと思っていたのです。神を求める強さ、深さがヤコブ物語の神髄です。

新約聖書で、パウロは「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」と呻っていますが、ヤコブも同じ呻きを持ち、神の赦しを求めた求道者です。彼は、兄・エサウと父・イサクを騙し、「長子の権利」「祝福」を奪い取っていますが、動産、不動産などの財産は全く受け取っていません。彼の騙しは、祝福を得たいという神への渴望が、そうさせたと言え、聖書は告げ、彼を「イスラエルの父」としています。